
真剣で剣士に恋しなさい！

照光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で剣士に恋しなさい！

【Nコード】

N6393Y

【作者名】

照光

【あらすじ】

この春から川神学園に転入してきた宮本総司。新たな土地、学園での生活にようやく慣れてきた彼は本来の目的を果たすべく動き出す。

それは武神と謳われる川神百代と戦うこと。

この小説は真剣で私に恋しなさい！の二次創作です。本編のネタバレがたくさんあるのでこれから真剣で私に恋しなさい！をする人は読まないことを進めます。

それでも全く問題なし！という方、すでにプレイ済みの方は応援よろしく願います。

武神との激突 1

リリリリと鳴る耳障りな時計の音が朝の始まりだ。掛け布団をはらい、宮本総司みやもとそうじは体を起こす。

洗面所に立ち顔を顔を洗う。早朝の冷たい水が残っていた眠気を吹き飛ばす。

すっきりしたところで着替えて朝食の支度を済ませる。そして模造刀を鞘袋に包んで家を出る。

川神市内の住宅街やクラスメイトが住んでいる島津寮を通り過ぎて多馬川へ。そして多馬大橋近くで岸边に下り、そこにいる人物へ声をかける。

「おはよう、共 黛み」

「おっ、おはようございますっ!!」

声をかけられた少女は素振りを止め、こちらを振り向く。相変わらず他者を威嚇するような怖い顔だ。

黛由紀江みづゆきえ。総司が通っている川神学園の一年生だ。

「黛、顔」

「はっ、はい。すみません!」

指摘され、即座に謝罪する黛。しかし顔はまだ強張っている。

「で、どうなんだ?」

小さくため息をついて尋ねると、強張っていた黛の顔が一気に暗くなる。

それだけで答えを察するが、総司はあえて口にする。

「まだ風間たちとも仲良くなれず、友達もできてないか」
「はい……」

目の前でぶわっと滂沱のごとき涙を流す後輩と知り合ったのは総司が川神学園に入学して一週間たったころだ。

借家の庭で太刀を振るい終え、多馬川にランニングをしていると、ここ多馬大橋の影で一人素振りをしている彼女を発見したのだ。

一目見ただけで彼女が凄腕だということはわかった。流麗な太刀さばきに足運び。化け物じみた剣士を幾人も知っている総司だが、彼女はそれらに匹敵している。

よもや川神市でこれほどの剣碗を持つ相手と出会えたことは総司にとつては行幸だった。川神市は川神院という武術の総本山があるが、神島のような化け物じみた剣客がいるという話は聞いていなかったからだ。

彼女からいろいろと話を聞いた結果、総司は朝はここにきて黛と共に早朝のけいこを行うことにしたのだ。

「まゆつちもいろいろと頑張つてはいるんだが、どうも長年一人だったせいか積極性が足りなくてな」

少年のような声でそう言うのは彼女の両手に乗っている携帯ストラップ”松風”だ。黛は付喪神と言っているが腹話術で黛が話していることは同じ技術を持つ総司にはすぐにわかった。

「つーか松風よ。おめえ学校では大人しくしてんのか？」

そう喋ったのは総司が懐から取り出した松風と同じ程度の大きさの狼の形をした人形だ。

「ま、真上まがみのダンナ……」

「いつもみてえに由紀江嬢ちゃんに話しかけてねえか。嬢ちゃんが落ち込むたびに励ましたりしてねえか？」

「ま、真上さん。松風は私は元気づけよう」と

「んなこたあわかつてるさ。でもな嬢ちゃん、おめえさんと松風が話す姿を客観的に見たらどうよ？ 近寄りがたいとおもわねえか」

野太い声でそう語る狼、”真上”はもちろん総司の腹話術だ。過去に仲間の腹話術を勉強した際、作り上げたキャラクターだ。

ちなみに真上の登場で黛の両手に乗っている松風は器用にも震えている。その態度は真上との初対面の時、好物が馬肉と言ってからだ。

「いいかい嬢ちゃん、松風。話すなどはいわねえが学校ではなるべく自重しな。そうでもしなきゃますます友人が作りにくいと思うぜ」

そう言っつて真上を懐に戻すと総司は立ち上がり、鞘袋から二つの模造刀 太刀と小太刀 を取り出す。

右手に太刀、左手に小太刀を以て刀を振るう。父より教えられてから、一日も欠かしたこともない型を綺麗になぞる。

総司の後ろでも黛が素振りを再開している。すでに気持ち切り替えたのだろう、いつもと変わらない可憐で鋭い黛流の太刀筋が見える。

しばらくしてセツトしていた携帯のアラーム音が鳴り、総司は動きを止める。同じように隣の黛も止まる。

いつもならここで別れの挨拶をして家に帰るのだが、総司は黛へ声をかける。

「黛」

「は、はい。なんですか」

「川神百代を見たことあるだろ。どう思った？」

唐突な質問に怪訝そうな表情になる篤。しかしすぐに閉じた口を開く。

「とても強い人だと思います」

「……」

篤の感想は総司と同じものだ。

川神百代。武神の異名を持つ最強の武道家と目されている女傑。数回ほど彼女の決闘を見ているが鉄心や道雪が危惧するような雰囲気はない。

とはいえ今更疑ってもしょうがない。真実かどうかは、今日でわかるのだから。

「あの、川神先輩がどうかしたんですか」

「いや別に。何でもない」

別れの言葉を告げて総司は多馬大橋から立ち去る。そして家に帰りつき、汗を流した後携帯でメールを送信する。

送り先は二つ。一つは川神学園学長川神鉄心、もう一つは教諭のルー・イーだ。

多馬川沿いを直江大和は幼馴染たちと歩いている。大和を含めたその面々は『風間ファミリー』という名で呼ばれている。

しかしそのリーダーたる風間翔一は今いない。しかしそれもいつ

ものことなので六人で登校している。

「あー、だれか決闘しかけてこないかなー」

そう言っつて大和の隣を歩くのは地上最強の姉こと川神百代だ。人間とは思えないほどの逸話をいくつも持ち、しかもその全てが真実という頼もしくも恐ろしい人物だ。

その反対では幼馴染の一人椎名京が腕をからめようとしていたので、さりげなくよけるが結局からめられてしまう。過去、いろいろあつた結果大和にぞつこんとなつてしまっている。

「京。歩きにくいんだが」

「私と大和が恋人になつた時の予行練習」

「そんな予定は今のところありません。離しなさい」

「ち。……あ」

舌打ちした京が目を細め、訝しげな表情となる。その視線の先は多馬大橋の手前だ。

「どうしたの京」

「誰かいるのか」

島津岳人、師岡卓也。風間ファミリーの面々がそう声をかける。

共にガクト、モロというあだ名を持つ大和の友人だ。

多馬大橋とはまだ百メートル程度距離が離れており大和たちには当然見えない。

「宮本くんがいる」

「宮本くんが？」

首をかしげるのはワンス子こと川神一子だ。そして大和も眉をひそめ、モロとガクトを見る。

「二人は何か知ってるか」

大和の問いに両者は首を横に振る。同じようにワンス子や京を見るが二人もガクトたちと同じ反応をする。

大和達2-Fのクラスメイト宮本総司はこの二人とここにいないキヤップこと風間翔一と結構仲がいいのだ。またワンス子や大和ともそれなりに親しく、人見知りの激しい京ともうまい具合に付き合っている。

モロとはゲーム好きという共通の趣味があり、剣術を習っている部分ではワンス子と時折武術や鍛錬について話をすることもある。また時折休み時間や昼休みなどで小説も読んでおり、何度か面白い小説について京に訪ねていたこともあった。

ガクトやヨンパチこと福本育郎ともたまにだがエロトークもし、大和とは賭場で敵になったり、味方になったりしたこともある。実際一度ほど彼の助けでけっこうなピンチを切り抜けたこともあるのだ。

彼は問題児や私の強い生徒係を集めた2-Fの中で、彼は委員長の甘粕真与、熊谷満のような穏健派と言ってもいい。しかし大和としては彼はある意味不気味な存在だと思っている。

新クラスになり、オリエンテーションも終わったこの次期、趣味の合うもの、気の合う者同士である程度のグループや友人ができてもいいのだが、彼にはそういう雰囲気はない。誰とも仲良くしつつも均等に距離を置いているように見えるのだ。

「誰かと待ち合わせかな」

「でも彼とそんな風に親しい人っていたっけ？」

ワン子達がそう言っているうちに大和でも見える距離まで来ていた。京よろしく文庫サイズの小説を手に行っている。

宮本はキャップとガクトの中間あたりの長身で黒髪黒目といった純日本人風な外見をしている。顔立ちもそれなりに整っており美容院などですっかり整えてもらえばエレガント・クワット口に匹敵するんじゃないかとクラスメイトの小笠原千花が言っていた。

大和が思わず注視したその時、彼は本を閉じて鞆にしまうと、こちらへ歩いてきた。

「おはよーっ、宮本くん！」

元気よく声をかけるワン子へ宮本は普段通りに挨拶をする。モロ、ガクト、京、そして大和とも挨拶をかわした彼はかすかな微笑を浮かべて、百代の前に立つ。

「はじめまして百代先輩。俺は2-Fの宮本総司と言います」

「待っていたのは私か。何の用だ。決闘か？」

百代の冗談じみた返しに思わず大和は失笑する。

「ええ、その通りです。あなたに決闘を申し込みます。」

時間は本日の放課後。場所は川神学園のグラウンド。決闘方法は戦闘です」

だが宮本の言葉を聞き、啞然となる。百代を除く全員が驚きのあまりに固まり、一方の百代は愉快そうに唇を曲げる。

「ちなみにこの話はすでに学長やルー先生にも通してありますから問題ありません」

「ずいぶん準備がいいんだな。わかっていると思うが決闘となれば

私は手を抜かないぞ？」

「当然です。　そんなことをされては俺が川神に来た意味がない」
そういつた瞬間、宮本の姿が消える。直後に彼がいた場所からかすかな土煙がたっているのを大和が見たのと同時に、隣の百代が後ろに振り返る。

同じように大和や他の面々も振り返ると、一メートル程度の距離に宮本の姿があった。

「い、いつの間にも後ろへ!？」

「全く見えなかった……」

ワン子が驚愕の声を上げ、京が呆然と呟く。大和を含めた男たちはただただ驚くしかない。

宮本は笑みを浮かべたまま「残念」と呟き、肩をすくめる。

「ひっかけてある上着を奪おうと思ったんだが、さすがにそう簡単にはいかないか」

「……私の制服は高いぞ？」

百代が静かな声でつぶやくのを聞いて、大和は彼女を見る。

すると案の定嬉々とした表情を浮かべている。それと同時に女性としても武道家としても完成された肢体から大気を振るわせるほどの膨大な闘気が溢れ出る。

一方の宮本もそれに全く怯まない。それどころか笑みが深くなっている。言い知れぬ迫力が生まれている。

大和はあわてて止めようとするが、それより先に宮本が手を前に出す。

「落ち着いてください百代先輩。今のは軽い冗談です。」

それにそんなに慌てなくても放課後はじっくり付き合いますよ」

そう言って再び宮本は姿を消す。先ほどと同じように百代の動きに続く大和達。彼は最初と同じ場所に立っていた。

「みんなもいろいろ知りたいと思うけど全ては決闘の後で話す。だからできる限り今日の決闘のことは黙っていてくれ。

ああそうだ百代先輩。昼休みのラジオで宣伝したいなら、してもいいですから」

そう言って彼は「それじゃあまたあとで」と言い、多馬大橋へ歩いていく。

穏健派だと思われていたクラスメイトの突然の豹変ぶりに皆が啞然としている中、百代はつぶやく。

「久しぶりに手ごたえがありそうなやつだ。放課後が待ち遠しいな」

< つづく >

武神との激突 1 (後書き)

先月末、偶然真剣で私に恋してる！のアニメを見たのがはじまりでした。

原作を購入し、ドラマCD、小説も手に入れ、今では来年一月発売の真剣で私に恋してる！S が待ち遠しくて仕方ありません。そんな衝動に突き動かされて書き始めた小説ですが、よろしくお願います。

武神との激突 2

学校の放課後のグラウンドは運動系部活の支配におかれる。それは川神学園としても例外ではない。

しかし今日の放課後のグラウンドにはいつもの支配者たちの姿はない。あるのは三つの人影だ。

決闘の立会人である川神学園学長川神鉄心、学園の教諭のルー・イー。そして決闘する学生の一人、川神百代だ。決闘を申し込んだクラスメイト宮本総司の姿はまだない。

そしてこの決闘を大半の生徒が各クラスの窓際に集まり見ている。その一人である大和はグラウンドを見て、腕時計を見て、呟く。

「まだ来ないのか」

「開始予定時間からもう十分は経ってるよね」

隣の京がそう言い、他の皆も頷いたり、時間を確認する。だがグラウンドにいる姉こと百代はただ静かに腕を組んでいる。

「もしかして逃げちゃったのかな」

やや距離が離れた場所にいるクラスメイトの小笠原千花がうそぶく。その言葉がきっかけになったのか、他の2・Fの生徒たちからも似たような言葉がささやかれる。だが現場を目撃した大和たち風間ファミリーはそれに対して無反応だった。

彼が来ないはずはない　大和が思っていることを皆も思ってい

るのだらう。

朝はあまりの唐突な宣言の衝撃で気が付かなかったが、あの時の宮本の雰囲気は百代やルー、川神院の修行僧たち。武に心血を注ぎ込んだ達人らと非常に似ていたのだ。

百代たち川神院の武人を幼いころから見ている大和達にとっては確信している。そのような人物が自分から言い出した勝負から逃げるなどあり得ない、と。

さらに十分が経過する。立会人二人や百代が平然としている一方、2-Fのみならず他のクラスからも疑問、疑惑の声が上がりはじめたころ

「すみません。遅れました」

悠然とした足取りで校舎から宮本が姿を見せた。

謝罪はするがその表情には申し訳のなさが一片もない。

「ずいぶん遅かったの」

「どうしたのかネ」

「いやー。決闘前に体調を整えようと思って軽く眠っていたんですけど、ついつい眠りすぎてしまっただけ」

立会人二人に頭を下げて、宮本は百代と対峙する。

「すみません百代先輩。お待たせしました」

「女を待たせるとはいけないな。その分も含めてしっかりその身体に教えてやるわ」

百代は鬼が浮かべるような薄ら笑みを浮かべ、朝に見せた以上の闘気を放つ。それだけで各クラスのざわめきが収まる。

しかし対峙している宮本は全く表情を変えていない。百代に引け

をとらない鬨気を発し、左腰に差してある太刀と小太刀を引き抜き、構える。

「3 - F、川神百代」

「2 - F、宮本総司」

名乗りを上げた両者に鉄心は頷き、

「いざ尋常に、はじめい!!!」

銅鑼のような勝負開始の声と同時に大和の目の前で二つのことが起った。

一つは大地に鳴り響くような重厚な音が聞こえたこと。そしてもう一つは百代と宮本が互いが最初にいた位置に背を向けて立っているということだ。

「え、今何が起こったの??」

1 - Cのクラスメイトが不可解な声を上げる。無理もない。一般人からすれば二人の位置がそっくりそのまま入れ替わったようにしか見えないからだ。だが由紀江の眼には両者が何をしたのか、はっきりと捕えていた。

鉄心の開始と同時に百代が一気に間合いを詰めて正拳を繰り出したが、それを宮本が左手の小太刀で受け流し、それと同時に総司は百代の懐へ入り込み右の太刀で腹部を打ち付け、即座に間合いを取ったのだ。

「おいおい。宮本の兄さん、とんでもねえぞ」

ポケットからこっさり姿を見せた松風が驚嘆したように言う。由紀江もまったく同意見だ。

剣を合わせた際に、彼の腕が自分と同等かそれ以上かもしれないと薄々は思っていたが、これほどまでとは思わなかった。百代の正拳突きはただの正拳突きだが、そのゆえに動作は速い。

由紀江だったらかわして反撃まではできるが当てられるかまではわからない。しかし宮本は受け流して反撃したうえ間合いまで取った。そしてそれは二つの事実を証明してもいる。

一つは彼の動体視力が恐ろしく優れていること。そしてもう一つ

反転した百代が再び宮本へ即座に接近し、弾幕のような無数の拳打を放つ。だが宮本はそれを両の太刀で全て弾いてしまう。

さらに百代の双眸が鋭さを増す。拳の弾幕に加えて鞭のようなしなやかな上、下段の回し蹴りも放ってくる。拳打から蹴り、蹴りから拳打への切り替えもほとんど隙らしい隙はない。

だがそれでも宮本には当たらない。拳打も蹴りも両の太刀で弾き、体捌きだけでかわしてしまう。さらに攻撃に切り替える時を狙って太刀を振るい、それらが見事に百代の体を打つ。あまりの速さに由紀江でもその全てが見えない。

もはや間違いはない。彼 宮本総司は”武神”川神百代よりも速い。全ての動作における速度で彼女を上回っている。かつて由紀江が打ち倒した武道四天王の橘も相当に速かったが、彼は完全にそれを凌駕している。

まるで稲妻、雷。彼の戦うさまを見ながら、ふと由紀江は思った。

太刀と拳が激突し、火花を散らせ、周囲へ衝撃波が放たれる。

今ですすでに数十回目の激突。百代は新たな一撃を放とうとしたが、それよりも早く宮本が太刀を引き、後ろへ跳躍した。

着地して顔を上げた宮本にはさすがに疲労の色がある。瞬間回復という能力を持つ百代は戦闘中でも即座に回復するので疲れはない。だが追撃はせず、息を吐き、姿勢を整える。

(まさかこれほどとはな)

朝会った時、うつすらとだが武道四天王に匹敵すると感じてはいたがそれどころではない。四天王最強である自分と肩を並べるほどに目の前の男は強い。

力や体力では百代に分があるが、速さでは完全に上をいかれている。技のキレもさほどの差はないが、やや自分よりも上とみて言い。敵の能力を鑑みて、百代は歓喜の笑みを浮かべる。自分に拮抗する強者と出会えたことに対する悦びの笑みだ。

(もっともつと闘いたい、そろそろ潮時だな)

場所が場所なだけにお互い全力は出さず、純粹な武芸のみで戦っている。本気を出して奥義でも放てば川神学園を一瞬で破壊しかないからだ。

だがこのまま続けていれば自制も難しい。百代の内で燃え盛る闘争の炎が暴走しかねない。

(ま、後日川神院で改めて勝負するか)

目の前の男がそれを断るとは思っていない。闘っていてわかったが、彼は自分や釈迦堂によく似た臭いを感じるのだ。

闘いという麻薬に魅入られた武芸者^{もの}。死闘の中でこそ、心からの生を感じられる戦闘狂。彼も自分と同じ、武度の闇の道に足をかけている人間なのだ。

「はあああ……」

大きく深呼吸をしながら体内の気を操り、構えを取る。

川神流、夢幻の構え。かつての師、釈迦堂が得意とした必殺の構えだ。この一撃でこの勝負に幕を引く。

「はっ！！」

気合の一声と共に、体の隅々までに行き渡っていた気を一気に爆発させて、百代は宮本へ迫る。

「川神流、無双正拳突き！！」

現状で出させる最強最高の一撃を、宮本は迅雷の速さで動き太刀と小太刀で受け止める。

それを見て百代は驚きつつも、小さく笑みを浮かべた。

（その判断は、失敗だったな！）

交差して百代の拳を受け止めていた宮本の太刀は次の瞬間、粉微塵と化してしまった。

宮本の双剣は川神学園の決闘で使用されるものだ。それが今まで百代の拳とぶつかり合っても無事だったのは、彼が気で刀をコーティングしていたからだ。

だが渾身の一撃はそれを見事に打ち砕いてしまった。それが予想外だったのか、宮本は大きく目を見開いている。

そしてその隙を見逃す百代ではない。即座に姿勢を正し、踏み込み、左の拳を握る。

(これで決める！)

左の無双正拳突きが放たれる。疾風の勢いで至近距離からの一撃にさすがの宮本もどうしようもなかったのだろう。身じろぎ一せず、百代の拳を右脇腹で受ける。

「……………っ!?!」

声こそ挙げないが、苦悶の表情を浮かべる宮本。百代はアバラ数本を砕いたという確かな手ごたえを感じ、一切容赦なく拳を振り切る。

そして宮本は宙に浮き上がる。気で体を覆い防御していたのか、数十センチほどしか浮かばない。

だがこれで勝負は自分の勝ち。そう思った時だ。地面に背中から倒れこみ、数回バウンドした宮本が後ろ周りで姿勢を正すと同時に、その姿が消えてしまった。

(これは、朝の ……!?)

その思ったと同時に百代は背後に怖気の走るような殺気が出現する。

すぐさま振り向いた百代の眼がとらえたのは、抜刀したような姿勢の宮本だ。

否。刹那にその誤認を訂正する。百代へ振り上げられた右手には刀があった。

もちろん先程砕けたものではない。黄金の光と火花を散らす刀。そう、まるで雷を凝縮してできたような刀だ。

回避の言葉が脳裏に浮かんだが、そこまでだった。体が動く前に雷の刃が百代の体を切り裂いた。

「それまでい！！！」

鉄心の怒声が響き渡り、大和は百代の勝利に喜び　そして驚く。ほんのつい先ほどまで百代の拳打を受けた宮本が吹き飛び、地面に転がっていたはずだった。その彼がなぜか百代と対峙しており、さらに刀を抜刀したような視線を取っている。

一方の百代も鋭い顔に汗を滴らせており、どういうわけか百代の着ている川神学園の制服に右腰から左胸に一本のラインが走っている。そして百代はそんな制服を右手で押さえている。

「京、あれは」

「刀傷みたいだね」

「でも宮本くんは無手だよ？　使ってた刀もお姉さまが壊しちゃったのに、どうやって……」

ワン子の言うとおり、宮本の手には何も無い。しかし体勢は居合い抜きをした直後に見える。

大和が不思議に思っていると、鉄心が百代、宮本に近づき、言葉をかわした後、右腕を大きく振り上げる。

「勝者、川神百代！」

頭の芯まで響くような鉄心の大声が響き、校舎のざわめきをも消し飛ばしてしまう。

無音となる学園だが、しばらくして歓声が湧き上がる。他の生徒達が勝負がついたことを遅れて理解したのだろう。

「さすがです！ 百代先輩ー！」

「挑戦者も凄かったぞー！」

「キヤー、ステキです川神センパイ！」

「次は勝てよー！」

学園中の生徒達が讃える中、立ち上がった宮本と百代が握手を交わし、さらに歓声は高まる。

ルーや鉄心と共に百代たちが校舎に入ったのを見て、百代のファンである2・Fの女子が教室を飛び出す。廊下を見れば他のクラスからも同様の女生徒の姿が見える。

大和は慌てず、風間ファミリーの仲間と共にゆっくりと女生徒たちとはまったくの逆方向へ歩いていく。しばらく歩くと廊下の壁に寄りかかっている百代を発見する。

「姉さん、お疲れ様」

声をかけると、俯いていた百代は顔を上げ、すぐにいつもの明るい笑顔を作る。

それがきっかけで風間ファミリーの皆がいつせいに百代を取り囲む。皆と一通り言葉をかわして、飛びついてきた妹を撫でながら、百代は言う。

「あいつ、今日の六時ごろ、島津寮に来るそうだ」

百代の言葉に大和はただ黙って頷いた。

<つづく>

武神との激突 2 (後書き)

というわけで百代との最初の戦いでした。

なんだか昨日から調子がいいです。次話は明日投稿できるかも…。
それではまた次回。

「みんな、忙しいところ集まってくれてありがとう。」

「じゃあさっそく話をしようか、と言いたいんだけどその前に一つ」

島津寮のリビングで皆からの注目を受けていた宮本は視線を右に向ける。

その視線が見る先 京とワン子の後ろにはクッキーの姿がある。

「なあ直江。それ、なに」

「クッキーって言うんだ。見てのとおりロボットだけど、俺たちの仲間でもある」

九鬼財閥製だよとモロが付け加える。

しかし宮本の困ったような表情は変わらない。おそらくこういったものを見たことがないのだろう。

まあ無理もない反応だよなと、大和は思う。先月ここに引越してきた後輩の少女も初めてクッキーを見たときはたいそう驚いていた。

「クッキー、ご挨拶」

京に促され、クッキーが宮本の側による。ぬ、と警戒するように眉を潜める宮本。

「初めまして。僕の名前はクッキー。よろしくね」

「み、宮本総司だ。直江たちとはクラスメイトだ。よろしく」

「特技はポップコーンの製造です。お近づきのしるしに一つどうぞ」

いつものように腹部から体内で製造したポップコーンを取り出し、宮本へ差し出すクッキー。

これも見慣れた光景だが、宮本は大きく目を見開いている。

「クッキーのポップコーンはおいしいわよ」

「お、おう」

ワン子に言われ、宮本はゆっくりとポップコーンの入った容器を受け取る。しばしポップコーンを凝視していたが、覚悟を決めたような表を作り、口に含む。

しばし顎を動かして咀嚼すると、目をぱちくりさせる。

「おお、美味しいな」

「食べたくなったらいつでも言ってね」

「ああ」

クッキーは笑顔を浮かべてもとの場所へ戻る。ぎこちなくではあるが宮本が笑顔を見せたので安心したのだろう。

数回ほどポップコーンを食べた宮本は口元を拭き、再び姿勢を正す。

「さて、それじゃあ話をしようか」

落ち着きを取り戻した宮本は、わずかな笑みを見せて言った。

「いろいろと聞きたいことがあるだろうが、まず俺のほうから言うべきことを言わせてもらう。」

俺がここ川神にきたのは川神流総代、川神鉄心の依頼を受けたわが師、神島道雪の命令だからだ。

そしてその命令は、川神の後継者である川神百代と戦うこと。」

宮本の言葉でリビンググの中に緊張した空気が生まれたのを百代は感じる。

その空気を破るかのようにワン子が訊ねる。

「どうしてお姉さまと戦う必要があるの？」

「理由は簡単、百代先輩の鬱憤や戦闘衝動を発散させるためだ。それが戦う理由であり、目的。」

返答にワン子の表情は硬くなり、大和はわずかに目を細くする。

「百代先輩と昔から親しいお前達だ。薄々気がついてるんじゃないか？ 百代先輩が満身に戦えず、鬱憤をためていることに。」

「……それは、まあそうだ。」

難しい顔で大和が頷く。

「学長や師、道雪はかなり危険だと見ていた。このままでは道を踏み外しかねないと。魔道へ堕ちてしまいかもしれないと。」

「そんなことは……！」

いきり立つワン子。しかし宮本は手を前に出し、ワン子が立ち上がるのを止める。

「俺も最初は疑問だった。百代先輩の決闘するところは何回か見ていたが、そこまで重要視するほどのものじゃないと思っていた。」

放課後、決闘をするまでは」

そう言い、宮本は厳しい表情をする。

「あの決闘で、俺は使わないはずだった”神島の剣”かしまを使ってしまった。鉄心さんたちにも使わないと言っておいた、自ら禁じた技を」

”神島の剣”。その名前を聞き、百代は宮本が最後の一撃を繰り出した黄金の剣を思い出す。

そして思い出す。あの場で鉄心が百代の勝ちを宣言したのは宮本が負けを認めたからだ。百代としてはいささか不可解だったのだが、そういう理由があったようだ。

「約束したことを反射的とはいえ破ったのは百代先輩が俺の想像を超えた難敵だったこともあるが、何より一番の理由は百代先輩の発する鬼気の影響を強く受けたせいだ。」

戦って分かった。百代先輩のそれはかなり深刻だ。俺の見立てだとあと一年も放っておけば、鉄心さんや道雪師匠が予想するとおりの最悪な事態になりかねない」

「随分はつきり言うんだね。百代先輩の具合はわからなかったのに」
「……それはただ単に俺の眼力が師匠や学長に及んでいないだけだ。遠くからわからなくても近づけば、接触すればわかるなんてことはいくらでもあるだろう」

京の言葉に何故か宮本は視線を逸らして言う。

「そうだね。遠くから見たら大和はかっこいいけど、近くで見たら

もっとかつこいいし接触でもしようものなら……大和おゝ!!」
「どわっ!? み、京突然抱きついてくるなっ! どこ触ってる!」

京の起こすいつもの行動 初対面の人間から見たら奇行 に
またしても宮本は驚きをあらわにしている。そんな彼へガクトが「
いつものことだ」と教えている。

少しして気を取り直すように咳をして宮本は言う。

「……ともかく百代先輩をそうさせないために俺はここに来て、今日初めて戦ったというわけだ。俺からの話は以上だ。何か質問はあるか」

「はい。質問だ。さっき言ってた”神島の剣”ってなんだ? 神島ってどんな流派なんだ? お前と同じぐらい強い奴どれぐらいいるんだ?」

百代が放った矢継ぎ早の質問に宮本は嫌そうな顔をして、ため息をつく。

「いきなりの質問ですね百代先輩。まあ聞かれるとは思ってましたが」

「じゃあキリキリと答えろよ後輩」

「順番つてものがありますからまず神島について話します。」

神島は全ての日本剣術の源流となったいわれている最古参の剣術です。もっとも川神院のように名はほとんど知られておらず伝説とも言われています

「でもお前が使う以上そうじゃないわけだ」

「まあそうですね。で、次は”神島の剣”ですが、これは百代先輩にはどのようなものは想像がついているんじゃないですか」

「まーな。でもやっぱり最後の一撃に見せたあれがそうなのか」

宮本は無言で首肯し、右手を前に差し出す。
するとそこへ気が集まり 光が生まれ、バチバチツという音と
共に火花を散らす。

「え！？ これ何？」

「電気だ。より正確に言えば雷。」神島の剣”を使える人間は気を
雷に変換でき、雷を操れる。そしてそれを戦いに用いるために”剣
”と呼ばれているんだ。

剣は古代における戦いの象徴みたいなもんだから、そう呼ばれた
らしい。慣れればこんなこともできる」

さらに気が右手に集まり、膨大な量の雷が生まれる。

そしてそれがゆっくりと一本の太刀の形を成す。それは紛れもな
く決闘の最後で百代が見た剣そのものだ。

雷の太刀を見て百代以外の皆がおお、と声を上げる。特にモロは
やや興奮気味だ。

「凄い。まるで銀河戦争の剣みたいだ！」

「形は違っけど結構似てるわね。……あ、そうだ、宮本くん」

「なんだ川神」

「電気を出せるってことはさ、それを手から放てる？ ほら、銀河
戦争の悪役がビビビ〜って出すみたいなアレ」

きらきらと目を輝かせるモロとワン子に宮本は凄く嫌そうな顔を
する。おそらくあれは神島の奥義なのだろう。

そう思い止めようとするが、気が付けばほかの皆も何やら期待に
満ちた視線を送っている。クッキーまで。

(……………止めるのは無粋かなあ)

宮本が断れば一緒に皆を止めてやるか。そう思い百代は見守る」とにする。

「まあできなくはないけど」

「ホント？　じゃあやって見せてよ！」

「……いいけど、誰が電撃受けるんだよ」

「じゃあガクトで」

「おい京！　何で俺様なんだよ！」

「ガクトが普段から鍛えてるから少しぐらいの電気なら平気かなって。遅しい筋肉してるし」

「よっしゃ宮本、バツチ来い！」

「単純ねー。つてええ！？　何で京に！？」

「言い出しつぺの法則だ」

「ちょ、京。大丈夫か！！」

「や、大和。体が痺れて動かないの……」

「おい宮本！」

「ああ、言い忘れたけど今の電撃は軽く痺れる程度だぞ。体が動かなくなるほどじゃない」

「え？　うわぁ！」

「チツ、せつかく弱ったふりをして大和に介抱してもらおうと思ってたのに。こうなったら実力行使だ！」

「いつもやってることだろ！　離れる京！」

ぎゃいぎゃいと騒ぐ大和達と宮本。一月とはいえ同じクラスで親交があったせい、宮本も結構なじんでいる。

騒ぎが落ち着いたところで宮本は続ける。

「んで最後の質問だけど、俺は神島の剣士の中でも最上位ではあるが最強じゃない。師匠である道雪、当主補佐を除いても少なくとも

三人は俺と同等以上の強さを持っている人はいる。

そしてそんな”鹿嶋の剣士”の中で最強の四人が神島四神剣^{かしましんけん}。刀と雷^{けん}を变幻自在に操る無双の剣聖たちだ。ちなみに俺もその一人”
「なんかすごい名前だけど、その人たちや宮本くんはモモ先輩並みに強いんだ」

「同等以上だ。四神剣の連中は幾度剣を合わせた俺でも勝った回数より、負けた回数の方が圧倒的に多い。四神剣となっても引き分けだらけだ」

面白くなさそうに宮本は言う。一方の百代は彼の言葉を聞き、自然と顔が笑ってしまう。

自分と同等以上の存在がまだ日本にいる。驚き、そしてそれ以上の喜びが百代の頬を緩ませる。

「でもちよつと疑問。そんな強い人たちならどうして今まで無名だったの？」

「確かにそうよね。お姉さまクラスだったら嫌でも噂になると思うけど……」

「それは神島の剣術や道場の場所が秘匿されていたからだ。それに神島^{むつ}は古来から幕府や朝廷とも繋がりがあったしその辺はお偉いさんが協力してくれていたそうだ。

……嬉しそうな顔をしているところに水を差すようですが百代先輩、連中に勝負を挑んでも無駄ですよ。断られるか、ガン無視のどつちかですから」

「え」

百代の高まっていた闘気に宮本の冷水のような言葉が降りかかる。

「さっき言ってた無名の理由の一つでもありますけど、神島の剣士は同じ剣客、しかも自分に近いか、同レベルの相手でないと言いを

挑んだり、決闘を受けません。

幻の流派なんていわれたのも廃刀令が起こった明治以降だったそうですね

「ま、まあいいさ。私にはお前という新たな好敵手ができたんだ。脇腹の怪我が治ったら今度は本気で勝負しようじゃないか」

そう言つと宮本はなぜか半目になる。

おや、妙な反応だなと百代が思った時、呆れたように宮本は大きく息を吐く。

「人の話を聞いていましたか百代先輩。俺はここへ何しに来たんですか？」

「私と戦うためだろう」

「それはあくまで手段ですよ。あなたの抑えきれない戦闘衝動を抑えるのが本当の目的です。

そして今のあなたは結構満足してるみたいですから、次に戦うのは鬱憤がたまつた時ですよ」

「な……なんだって！？ 聞いてないぞ！」

「俺の言つた意味を理解すれば、そういうことになりますよ。理解力が足りませんね」

そう言つて口にポップコーンを放り込む宮本。

「そもそも俺だつて川神に来るのは本意じゃなかったんです。他の四神剣がいろいろと忙しいから消去法で選ばれてきたんですから。

それに俺も神島の剣士。武道家である百代先輩と戦うのは乗り気じゃないんです」

「少々期待させておいてそれはないだろう！」

「知りませんよんなこと。だいたい戦闘衝動もまともに制御できない二流の武道家なんて論外です」

宮本の投げやりな言い方に百代は思わずかつとなる。だが拳を握ろうとしたその時に宮本の気が爆発するように膨れ上がり、目の前に矢のような無数の雷が出現する。

「落ち着いてください」

「お前こそ落ち着いたらどうだ。私のことを知っているならの程度では意味がないことぐらいわかるだろう」

殺気を込めて睨み付けるが、宮本は全く動揺するそぶりを見せない。ただ無表情で百代を見つめている。

「確かに百代先輩には意味がないでしょうね。でも直江たちにはどうでしょうか？」

「すべて私が粉碎する」

「無理です。後ろを見てください」

気を逸らすための言葉に百代は当然従わない。拳を握り、闘気を漲れあがらせる。

しかし後ろから幾つもの息を呑む声が聞こえる。

「お、お姉さま……」

「姉さん、囲まれているよ」

緊張した大和の声を聞き、百代が慌てて振り向く。すると舎弟のいうとおりキッチンの方にリビングと同じように数十もの稲妻が並んでいる。

「神島流奥義『御雷』^{みかづち}。一瞬のうちに数十もの雷を発生させて多数の敵を殲滅する技です。」

本来なら溜めの時間や結構な量の気が必要とするんですが、ここが家の中なので発動するのは実に容易でした」

「……………！　そうか、家の中の電化製品の電気を利用して……………！」
「正解。さすが”軍師”って言われるだけあるな直江」

宮本は微笑み、さらに尖った雷が出現する。しかも皆の喉元、胸元言った超至近距離だ。

それを見てさすがの百代も齒軋りしてしまう。前面だけならまだしも後ろ、そして至近距離の雷をまとめて片づけるという真似は百代でも無理だ。下手に動けば大和達は無事で済まないどころか、命すら危うい。

闘気を落ち着かせ、拳を解くとそれに合わせたように雷は消える。

「さてと、それじゃあ言うべきことも言ったし、質問もこれ以上ないみたいだから俺は帰るな直江」

そう言って半分近く残っているポップコーンの容器を持ち、宮本は立ち上がる。

いまだ緊張している皆の間を通り、リビングから出ていこうとするが、出入り口で足を止め、

「ああそうだ。さっきのことで直江たちには少し迷惑をかけたな。貸しにしておくから、何か困ったことがあれば言ってくれ。」

それと百代先輩。一ついいことを教えます。俺以外にも、あなたの身近に強者はいますよ」

「何？」

「ヒントは灯台下暗し。それじゃあ明日学校で」

そう告げて、宮本はリビングから姿を消す。

彼の言葉の意味がわからず百代は大和を見る。しかし彼もさっぱ

りわからないといった風に首を振るのだった。

「ふう、まだ少し寒いな」

茜色に染まる住宅街を歩きながら、総司は息を吐く。かすかだが冬に寒さが残る空気のためか、吐いた吐息は白くなる。

「最後はちょっとやりすぎたかなあ」

今後悔してるのは百代に対してではない。大和に対して『御雷』の刃を向けたことだ。

百代を抑えるためとはいえクラスメイトに対してやるべきではなかったと、今改めて思い反省する。が、

「まあいいか。仲がこじれば、それまでってことだ」

彼らに嫌われることは気は咎めるが、気にするほどでもない。所詮彼らは自分にとっては顔見知りのクラスメイト。もしくは川神百代の仲間という程度の認識しかない。嫌われればそれまで、と総司は割り切れる。

そんな風に思ってた家まで歩いていると、ふと前方に人の気配を感じる。この数日ぶりに感じる気配は

「あれ？ 宮本じゃないか」

風間ファミリーのリーダーであり総司と同じ2-Fのクラスメイ

トの風間翔一だ。

数日間姿が見えなかったが、直江が言うとおりでどこかに行っていたのだろう。来ている洋服のあちこちは汚れており、ほつれている。

「よう。今帰ってきたのか」

「ああ、鹿児島まで言ってきたぜ。黒豚が急に食いたくなっただんでな!!」

元気よく言う風間の言葉に総司は表情を硬くする。生まれ故郷の鹿児島産黒豚は総司の好物でもあるのだ。

「そ、そうか。……美味かったか？」

「おう！ 行ってきたかいがあっただぜ！」

(く………！ 俺でさえ正月以来食べていない黒豚を………！)

八つ当たりと分かっているにも恨めしくなる。だがそれを懸命に抑える。そして次の仕送りが来たら黒豚を買うことを決意し、気持ちを落ち着かせる。

「どこでお前はどうしたんだ？ 家に帰る途中なのか？」

「ああ。今日はちよっと島津寮に用事があったんだ」

「ふーん。何の？」

「その辺は長くなるから直江たちに聞いてくれ。お前以外のファミリーは今だったら島津寮にいると思うから、今なら詳しく聞けると思うぜ」

「わかった！ なら急いで帰らねーとな。じゃあな宮本、また明日学校でな！」

滑舌よく言って、風間は疾走する。あの速さなら二分もかからず

寮につくだろう。

「本当に忙し奴。新介の馬鹿を思い出すぜ」

最年長でありながら、最も大人げない四神剣なかものことを思い、小さく総司は笑う。

「……今日のことを聞いて風間、お前はどう思うかな」

騒ぐか。残念がるか。それとも怒るか
そんな風間の姿を思いながら、総司は家に向かって再び歩き出した。

<つづつ>

武神との激突 3 (後書き)

てな感じてプロローグに当たる部分は終了です。この後は原作通りクリスが転入して来たり、まゆっち共々風間ファミリーに入りますので、その部分はありません。次回はゴールデンウィーク後からとなります。

それではまた次回。

風は雷と共に空をかける 1

今日の早朝は見事な五月晴れだ。活力を与えるような暖かな太陽の光、冷たくも心地よい柔らかな風。空には雲一つなく、紺碧のような鮮やかな色だ。

そんな気持ちのいい天気の前、大和はいつものように仲間である風間ファミリーの面々と学園に向かっている。

「あー、今日はいい天気だな。こんな日は学校なんかに行かず、昼寝でもしたいぜ」

「こらキャップ、そんなことは自分が許さないぞ」

風間ファミリーのリーダーである風間翔一 通称キャップの発言に噛み付いたのは、つい最近新たに風間ファミリーに加入したクリステイアーネ・フリードリヒだ。川神の姉妹都市であるドイツのリューベックからやってきた留学生で、クリスという愛称で皆から呼ばれている。

彼女は金髪碧眼な整った顔立ちに、風紀委員のような生真面目な表情を浮かべている。武士道の”義”を重んじると公言している彼女は正義感が強く真面目な性格だが、融通が利かない頑固さも持っている。勝利するためにいかなる手を尽くす”軍師”たる大和とはあまり気が合わず、幾度も意見を衝突させている。

「でもキャップの気持ち、少しはわかるわー」

「そうですね。本当に今日はいいいお天気です」
「うんうん。今日の日差しは眠気を誘うぜー」

ワンスの言葉に控えめに答えたのはクリスと同時期に風間ファミリーへ加わった一年生、黛由紀江と彼女の掌に乗っている馬型の携帯ストラップ松風だ。

北陸の古い武家出身で幼少の頃から剣術を初め、家事など幾多の習い事をしてきた彼女は今では非常に珍しい生粋の大和撫子だ。容姿も黒髪黒目という日本人そのまま、立ち振る舞いやしぐさにもどこことなく品や大和撫子特有の淑やかさがある。

剣術も家事もなかなかのもので、一見これといって弱点がないように見えるの彼女だが、今まで友人らしい友人がいなかったため社交性がほぼゼロに近く、同じ島津寮に住んでいるというのに大和たちともまともに話せるようになるまで一月近くかかった。

そして彼女の掌に乗っている松風は彼女が友人に飢えるあまり、腹話術を用いて作り出した存在だという。もともと彼女自身は九十九神が宿ったといっており、また大和たちも松風のあまりにも個性溢れる性格に自然と突っ込むのをやめている。

そんな新たな二人の仲間と共に大和たちが学園に向かっていくと、後ろからこちらを呼ぶ声が聞こえる。

「おはようー!」

大きな声で挨拶をしたのは案の定、宮本総司だ。何やら急いでたらしく、いつも手に持っている鞆は脇に抱えており、制服もところどころ乱れている。

「おはよう総司くん。でもそんなに急いでどうしたの?」

「いや、俺今日日直だったことをついさっき思い出して走ってきた。んで今川神達が見えたから、少し休憩……」

「そんなに急がなくてもいいんじゃないか？ お前だったら学園に到着するのに一分もかからないだろ」

「それは全力で奔ったときの話ですよ百代先輩。いくら俺でも緊急のときでもない限り本気で奔るなんて真似はしません。」

それにそんなことをしたら先輩を刺激してしまいますから、自重しているんです」

「別に自重しなくてもいいんだぞ？ お前という男に私は常に刺激されっぱなしだ。というわけで今日の放課後、川神院で私と手合わせしようか」

「相変わらず空気を吸うように戦いたがりますね。お断りします」

京の告白を断る大和のように宮本は百代からの誘いを断る。先日百代との戦いの後から見られる寸劇だ。

「大体百代先輩、今は新たに沸いて出てきた決闘者と日々手合わせをしているんでしょう？ 俺と戦う必要はないでしょうに」

宮本の言うとおりだ。今百代の下には日々多くの決闘者が現れている。今日も登校中にその一人と戦い、瞬殺して川神院に連絡したところだ。

今まで百代に挑むものは多かったが、それがさらに増えたのは宮本との決闘の後だ。彼が川神百代と引き分けたという話は短時間で日本はおろか世界各地に伝わった。

そしてその噂を聞き宮本と決闘しようとするものが大勢やってきたのだが『宮本氏と戦いたくばまずは百代と決闘し、強さを認めさせてみせよ』と鉄心が言っており、その結果百代は今まで以上に世界各地の猛者と戦う毎日を送っていた。

「確かにそうだけどさー、やっぱりどいつもこいつも齒こたえがないんだよー。だから私と戦えー」

そう言って宮本へ腕を伸ばす百代。しかし彼はすつとそれをかわして、クリスと由紀江の方を見る。

「おはよう黛、フリードリヒ。今日も元気そうだな」

「おはよう」

「おはようございます宮本さん」

クリスはそっけなく、由紀江はいつものやや引きつった表情で宮本に挨拶を返す。

クリスと由紀江。この二人は宮本への態度は対照的だ。クリスは固く、由紀江は大和たちに接するよりも柔らかい。

それは当然事情がある。クリスは転校していた次の日、頑なに苗字で呼ぶ宮本にクリスと呼ばせようとして決闘を申し込んだ。種目は戦闘だったため当然敗北。

そしてその敗北を知った彼女のお目付け役として一昨日2・Sに転入してきたマルギツテ・エーベルバツハ。クリスの父直属の部下であり、クリスを可愛がっている彼女は当然その恥辱をそそぐべく数日前に決闘を申し込むが同じように敗北。

しかも『学生の生活や勝負に親や軍人が首を突っ込んでくるとは過保護にもほどがある。ちったあ自重しろ』という当然のコメントを言つて、マルギツテを素手で完膚なきまでに叩きのめした。結果彼女は一月ほどの入院を余儀なくされたという。姉同然の人が叩きのめされたことがひっかかっているのか。

そして由紀江。もしかしたら彼女は風間ファミリーの中で一番宮本と仲がいいかもしれない。ファミリー加入後に聞いた話だが宮本は由紀江がまだファミリーに入る以前に知り合っており、友人と言うほどではないがそれなりに顔をあわせて、話をしていたと言つ。宮本も彼女に対しては大和達に比べて気安い感じがする。

「その様子じゃまだ同学年でも友達はできてないか」

「め、目星はつけているんです。今日こそはその子に話しかけます！」

「友達になるんじゃないかって話しかける段階なのかよ……。まあいいや頑張れ」

現に今両者は馴染み同士のように会話をしている。由紀江同様に彼女と話す宮本の雰囲気もクラスでの彼に比べれば幾分か気安い。

それから宮本は大和たち他の風間ファミリーの面々に声をかけると、先に行くと言って再び走り出す。力を抑えているためか大和にも見えるが、それでもぐんぐんと遠ざかっていく。

「大和×宮本くん。これは意外な。いや力関係から宮本くん×大和かな？」

「後姿を見ていただけで変な想像をするんじゃないやありません」

腐女子発言をした京をたしなめて、大和は再び宮本の姿を追う。

(今日もいつも通りだよな。でも……)

百代との決闘と話の後、キャップを除いた2-Fに所属する風間ファミリーの面々は彼に対してやや距離を置いていた。突然見せた彼の別の顔に戸惑っていたからだ。

変化したのは大和たちだけではない。2-Fの皆ともいろいろと変化が起こっていた。一部の男子女子は色めき立っており、また別の男子女子は大和たちと同じように距離を置いていた。敵対関係にある2-Sですら、一部を除いて他の2-F生徒のように接する者はいなくなっていた。他のクラスや学年は言わずもがなだ。

そんな周りに対して、宮本の態度は全く変化しなかった。そのせいか皆も次第に落ち着きを取り戻し、また大和たちもキャップの存

在もあつてか、いつの間にか以前と変わらぬ態度で接していた。

しかしそんな彼に大和は何か違和感というか、引つかかるようなものを感じていた。

どうしてそう思うのか大和にもわからない。何が引つ掛かるかもしかし百代と決闘した翌日から彼を見てみると、ふとそう思うのだ。遠ざかっていく宮本の後姿を大和は見つめる。しかし答えが脳裏に浮かびあがるようなことはなかった。

「やれやれ。ようやく振り切れたか」

多馬大橋の影からひよつこりと姿を現す総司。気で周囲を探り、百代の気配が遠のいたことを感じて、ほっと溜息をつく。放課後から一時間近くたった今、すでに時刻は夕方近い。しかし初夏ということもあつてか、空の太陽は明々と輝いている。

放課後になると決まって百代が2・Fにやつてくるのだ。そんな彼女の行動パターンは今のところ三つ。一つは舎弟である直江たちとの付き合い、二つ目は総司へ決闘の申し込み、三つ目が川神院での鍛錬の誘いだ。当然二つ目、三つ目はあの戦いの後から発生したものだ。

そして総司は当然それらを断り続けていた。二つ目は鉄心やルーという同レベルの強者がいないところでもやるつもりはないからだ。三つ目に関しては以前一度だけ付き合ったことはあったのだが、鍛錬後テンションが上がった百代が決闘を挑んできたのだ。あのときは鉄心がいたから何とか戦わずに済んだが、それ以降はとにかく断つては逃走しつづけている。

そんな総司に百代も時折追いかけてくることがあり、今日もそう

だった。とはいえ速度においては完全に百代を凌いでいる総司はただひたすらにその速さを以て逃げ回り、今こうして無事に安堵のため息をついているという次第だ。

「まったく、勘弁してほしいぜ。……ん？」

土手へ上がろうとしたとき、見慣れた人物を総司は見かける。多摩川の川辺に一人、鞆袋を手に持って体育座りしている女子。言わずもがな黛由紀江だ。

「どうしたんだあいつ」

彼女は澄んだ多摩川を見ているがその表情は汚染された川のように暗い。遠目から見ても分かるほどだ。

普通ならばまあ俺には関係ないですませるが、自分と同じ領域にいる剣士であり同じ剣の道を進むべき同胞を見過ごすほど、総司は冷酷ではない。

「黛」

「……あ、宮本さん。こんにちわ」

「おう。ところでどうしたんだ、そんな暗い顔して」

理由は思い当たるが、一応総司は聞いてみる。しかし黛は小声で「あの、えっと、その」と遠慮するように呟いており、はっきりした言葉を口にしない。

(……女子ってのはたいいてい甘いものが好きって話だったよな)

ゴールデンウィークに里帰りした際聞いた姉の言葉を思いだし、総司は言う。

「黛、今から時間あるか」

「え、あ、はい。特に用事はありませんが」

「それじゃあ少し付き合ってくれないか。今から仲見世通りで買い物しようと思うんだが何を買おうか少し迷っていてな。一緒に来てくれると助かるんだが」

「はっ、はいっ!! お付き合いますっ!!」

黛の相変わらずの怖い顔に突っ込んで、総司は彼女と共に仲見世通りへ向かう。もちろん百代と遭遇しないように気で探索することも忘れない。仲見世通りにつき、しばし歩くと目的地である和菓子屋に到着する。

「和菓子屋さんですか」

「ああ、この間帰郷した時にこの店のこと家族に話したら、姉さんや義妹が食べてみたいから送ってくれて言われてな。とりあえず女の子が好きそうな菓子を選んでくれないか」

「わ、私なんかでいいんですか？」

「問題ない。姉は結構お前と似ている部分があるし、義妹は日本のお菓子がとても好きだからな。試食もできるようだし、気軽に選んでくれ」

そう言われても恐縮しっぱなしな黛だったが、しばらくしていくつかの品を選別する。そのどれもが姉や義妹が気に入っていたので総司はそれらを買って、今度は別の店に入り、久寿餅くすもちを二つ注文。そしてその一つを黛に差し出す。

「ほら、食べよ」

「……え、えええええ!? いいんですか!？」

「付き合ってくれた礼だ。気にするな。ここの久寿餅は美味しいぞ」

やや強引に手渡して総司も自分の久寿餅を食べる。名産とまでなつた甘味を食べる最中、横目で隣を窺う。

すると黛も笑顔を浮かべて久寿餅を食しつつ、松風と会話をしている。雰囲気も先ほどに比べてやや明るくなったようだ。

「んで、どうして多摩川で黄昏てたんだ、お前」

そう尋ねると、お茶を飲んでほっこりとした笑顔を浮かべていた黛の表情がたちまちに暗くなる。

だが先程と違い、今度は口を閉じない。

「宮本さんには、私の目標をお話ししましたよね」

「ああ。確か友達百人、作ることもあったか。風間ファミリー入りしたから残り91人か」

「私のクラスに、一人友達になりやすい子がいるんです」

「名前は大和田伊予ってんだ」

松風を軽くこつぎ、総司は続きを促す。

「彼女は私と同じで外様組で、親しい友人がいないようなんです。

それで私は今までずっと声をかけようとしていたのですが」

「まゆつちの判断が遅くってさ」。いつもそれができないでいるんだよね」

「でも今日、席替えがありましたして、彼女と隣の席になったんです。

これぞまさしく絶好の機会！ そう思った私はずっと彼女に声をかけるべく狙っていたのですが」

「いろいろあつてチャンスがつぶれてさ」。起死回生の一発！ を狙って放課後にいっしょに帰らないかって誘おうとしたんだけどさ」

「それが失敗してしてしまった。だから多摩川を見て一人黄昏していたと」

「はい……」

再びずーんと落ち込む黛。そんな彼女を見て総司はふむ、と呟き、

「月並みだが黛、その大和田って子と友達になりたいんだっただけでチャンスを狙い続けることだ。」

あとお前の目標を達成するために言わせてもらおうが、公衆の面前で松風と話すのはもちろんやめて、人と話すたびに顔が強張るのもどうにかしろ」

「わ、わかつてはいるのですが、どうしてもそうなってしまっただけです」

「そうなるのはお前が長年他人と話せなかったことが原因だろう。でも今のお前には直江や風間といった友人がいるんだ。彼らと話して少しずつでもいいから改善するんだ」

「わ、わかりました。やってみます」

はっとしたような表情で黛は頷く。どうやら長年友人がいない弊害のせいだ、他社に頼るといふ考えが及びつかなかったようだ。

「しかしそこまで友達を欲しがらなくて、俺にはわからんな。もう風間たちがいるしあいつらで十分じゃないか？」

「大和さんたちのことはそうですけど。その、やっぱり、もっと大勢の人と仲良くなりたいたいと思うんです。」

私はいつも大勢の友達と楽しそうにしている沙也佳さやか あ、妹です。を見ていて、楽しそうだなって思っていましたから……」

父の後継者として見られていた自分に近づくような人はいませんでしたから、と黛はさびしそうな顔で付け加える。

「悪い、無神経なことを言った」

それを見て同じ剣士だから自分と同じように考えてしまったことを総司は深く反省する。そういえば風間ファミリーに入ったと連絡してきたときの黨の喜びようは尋常ではなかった。

あの時は大げさな奴だと思ったが今の諦観した顔から、自分と違い本当に彼女には友達らしい友達がいなかったのだろう。

「い、いえ。気にしてませんから、あの、頭を上げてください」

言われて下げている頭を上げると、黨があたふたしている。そんな反応を見て総司は思わず苦笑してしまう。

「なあ、黨」

年上だが、もう一人友人は欲しくないかと総司が声をかけようとしたその時、黨の表情が明るくなる。

総司ではなく、その後ろを見る視線を追って総司は思わず「うげっ」と声を上げる。

視線の先にある仲見世通りにいたのはクラスメイトとして馴染みである直江と椎名、そして風間だ。

そこまでは問題はない。総司が声を上げた理由は彼らを除いた四人目 川神百代の存在だ。

こちらと同じように直江たちも黨や総司に気が付いたのだろう。四人は真っ直ぐこちらへ近づいてくる。そして百代は獲物を前にした肉食獣のような表情を浮かべている。

それを見て総司は今度はどのようにして逃げるか、勘定はどうするのか、黨を盾にしたら少しは時間が稼げるだろうか等等、色々と思考しながら周囲を窺い、そして一点に視線が止まり、絶句した。

「な……」

総司が見ているのは先程とは別の和菓子屋だ。その店先に一人の男がいる。

店員と談笑しているその男は島津並みに背が高く、がっしりとした体つきだ。やや赤が強い黒髪は最近床屋に行っていないのか伸びており、背負った背囊にかかっている。いつものようにどこかに行っていたのだろう、服もどことなく汚れている。

「まゆつち。それに宮本も。珍しいな」

「二人きり、しかもこんなお店にいるなんて意味深。……もしかしてデート？ 邪魔しちやったかな、ククク」

「ほほう、私との付き合いは避けているのにまゆまゆとは付き合っているとは。ふふふ、ますます体の猛りが強くなった。こうなったら宮本、お前の体で鎮めてもらうしかないな」

「よう二人とも、奇遇だな！ ……って、宮本？ さっきからどこを見てんだ？ ……あー！」

突然の風間の大きな声に男を凝視していた総司は正気に返る。

どういうわけか風間が彼に近づき、親しげに話しかける。そして彼も気安い雰囲気で風間と言葉をかわしている。

それを見てさらに総司は驚くが、疑問は脇に置いて総司も風間たち近づき声をかける。

「よう新介」

「お？ ……あー、総司！ 久しぶりだな！！」

「そうだな、こうして会うのは春休み以来だ。で、四神剣の一人であるお前が道場から離れて、何でこんなところにいるんだ？」

ひきつった笑みを浮かべながら総司は目の前の男
最年長の四
神剣、菅原新介すがわらしんすけに問いかけた。

< 〓 〓 〓 >

風は雷と共に空をかける 1 (後書き)

タイトルを見て大多数の方が想像ついたと思いますが、今回は風間ファミリーとのからみがメインです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6393y/>

真剣で剣士に恋しなさい！

2011年12月2日12時49分発行